

耳納風土記⑬ 五庄屋と大石長野水道（後編）

前回の耳納風土記では「五庄屋と大石長野水道（前編）」と題して、五庄屋が人々の生活のために水道工事計画をたて、反対する村々を強い覚悟で説得し、ついには久留米藩の事業として工事実施にこぎつけたところまで紹介しました。今回は掘削工事の様子と、完成後の水道拡張について見ていきましょう。

寛文4年（1664）1月、普請奉行の丹羽頼母重次にわたのもしげつぐを最高監督者としていよいよ工事が始まりました。五庄屋は各所に張り付き、生葉・竹野・山本の三郡から1日500人の人夫を出し、願い出た村々からは特に多くの人々が働きに出ました。久留米藩は長野村入口に十字のはりつけ柱を建てて「もし工事が成功しなかった場合、庄屋をはりつけの刑にする」という脅しと励ましを含めた態度を示しました。これを見た村人たちは「庄屋どんを殺すな」を合い言葉に老若男女問わず、厳しい寒さの中で汗水を流して働きました。また五庄屋の妻たちは工事の成功を祈るために自分たちの髪を切り、久留米の高良山神社に捧げました。

工事は全てが順調だったとは言えませんでした。大石村から長野村まで溝を掘ったある日、水を流し込んだところ下流の糸丸村まで順調でしたが、非常に勢いで逆流し始めたのです。人々の驚きはもちろん、五庄屋の落胆ぶりは凄まじかったといいます。その晩から五庄屋は志波の金比羅様にお参りし、神様に助けを乞うたそうです。また溝の掘削中に大きな岩に当たった時は、その岩の下を掘ってそこに岩を沈め溝を通した話もあります。当時は現代のようにブルドーザーなどの機械はありません。人の手によって溝の両岸に石を積み、土を固めて土堤を作る作業がどれほど大変か想像に難くありません

しかし幾多の困難よりも、人々の思いと努力の方が遥かに勝ったのか、工事は予定より早い寛文4年（1664）3月に完成しました。筑後川からいざ水を流すと設計どおりに新しい溝を流れ始めました。人々は歓声を上げ、手を取り肩を抱き合い喜びました。人々の心を脅し続けたはりつけ柱は大勢の前で焼かれました。完成まで60日あまり、人夫はおよそ4万人。この大工事によって約75ヘクタールの田んぼに水が引かれました。これを機に水田拡張の機運が高まり、次々に拡張工事が行われ、拡張した水路の水の需要を満たすために延宝2年（1674）にはついに大石堰が完成しました。灌漑面積は約1400ヘクタールにもなり、水不足で悩んできた地域は水に恵まれた豊かな穀倉地帯になりました。

今日、ほとんどの水路や水門は昭和28年（1953）に起きた水害によって破壊され、大石堰は大規模なコンクリート製の堰になり、長野の水門は近代技術を駆使し、隈上川の下をくぐるサイフォン式の水路になるなど、当時の景色はほとんど見ることはできません。しかし筑後川沿いの堤防の上から豊かな実りが広がる田畑を眺めてみてください。五庄屋達をはじめ水道掘削工事に携わった全ての人々が命を懸けて私たちに遺してくれた景色が広がっています。



水道工事の起工



工事が無事完了し燃やされるはりつけ台